

光市医師会報

平成8年1月号

No. 279



浜辺の「初日」

光市医師会

新年のご挨拶

会長 近藤 龍一

あけましておめでとう御座居ます。

皆様それぞれ輝やかなしい新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。今年もどうぞよろしく願い致します。

さて、今年は医療費改訂の年ですが、先頃報道されたように3.4%で結着したもようです。そのうち薬価関連分が約2.4%ですから実質1.0%の値上げということで、これでは零に等しいものです。甚々腹立しいかぎりですが、財政状態を考えれば仕方がないのかも知れません。更に老人保険の外来分の包括化の提案も出て来て全く油断のならない状況です。介護保険も来年には導入の方向で、これも対応を誤ると深刻な影響を蒙りそうです。その上、来る通常国会に医療法の第3次改正案が上程される見込みで、これもしっかり見守っていないと大変なことになると思います。以上のように本年も我々の生活を直接脅かす難題が目白押しで、頭の痛いことです。しっかりと情勢を把握して、必要な時には充分意見を提出しなければと思っています。

日本は今、明治維新以来4度目の大変革期にあるということです。始まりはいうまでもなく冷戦終結からですが、大変革期が終って安定するまでは大体10年位かかるそうですから、後6年位はこうした政治、経済、社会の混乱がつづくものと思わねばなりません。又、世界は大競争時代（メガ・コンペティション・エイジ）に突入し、激烈な競争がすでに始まっているそうです。

昨今のリストラや価格破壊はこれらの表われかもしれません。そして、この時代のキーワードは「ロー・コスト」だそうです。

これを達成出来ないものは情容赦なく脱落、排除されるわけで、大変厳しい世の中になります。現在、各企業はこの嵐に見舞われているわけですが、全くコストに関係なく、従って極めてハイコストな分野が、教育・医療・警察の3つだそうです。

これら3つの分野にはコスト意識が全く欠落しているわけですが、他の分野が身を削る苦勞をしているのにいつまでも放置されているわけもなく、近い将来厳しいコスト削減を迫られることになるでしょう。我々としても、将来にわたって医療費の大巾な値上げは望むべくもありませんから、コスト削減に取り組みざるを得ないと思います。それにはまず、現在の規制のすべてを洗い出し、不必要なもの、時代に合わないもの、コストばかりかかって実効のないものを撰び出して、厚生省に撤廃を働きかけることが取り敢えず緊急に必要なだと思います。

暗い話ばかりで恐縮ですが、大変革期を終えると、案外充実した楽しい時代が到来するようです。それにはまず今の意識を変え、混乱に耐えることが必要のようです。

さて、今年は子年ですが「子」という字はもともと「孕」という字であったのが略されたもので、しかも「子」は子供の子という字で「ふえる」という意味があるそうです。

動物の中で最も繁殖力旺盛なところから十二支の最初に据えられたということです。現在世界には1,000種を越す種類があるようで、余り有難くないことです。しかし、人に嫌われる割には方言で愛称的なものが多く、「姉様」、「福太郎」、「福の神」、「嫁様」、「嫁っ子」、「嫁が君」などがあります。一般にネズミは人語を解すると信じられて

おり、ネズミ退治をしようと話すと彼らが用心するばかりが、逆にひどい仕返しをすると思われているからだそうです。

「餅花や かざしにきせる嫁が君」

芭蕉

今年が皆様にとってよい年であります様お祈りいたします。



〈会員広場〉

嘆いてばかりもいられない

「伝言ゲーム」というのがある。最初の伝言が何人かの人を経ると、最初とは似ても似つかないものになっている。医療の現場でこんな事が起きたら大変であるが、細かいことでは日常茶飯事、一人医師でやっている私としては、本当に頭が痛い。何故上手く伝わらないのだろう、人は動いてくれないのだろう。

今、私はその対策として、マニュアルを作っている。マニュアル、マニュアルという時代は終わったという人もいるが、今までに十分なマニュアルを作ってもみなくてそんなことをいうべきではない。ある弁護士は、事務員に何から何まで事細やかに書いてあるマニュアルを見せ、その通り実行

道 上 文 和

させ、業務が円滑に進んでいるのことも本で読んだことがある。私もそれを望んでいるのであるが、なかなか順調に作業が進んでくれない。ひとえに私の力の無さかと反省しきりなのであるが、ちょっと待て、と最近思うのである。

昨年は大変な年であった。震災あり、オウムあり、核実験あり、原発事故あり、銀行不正問題あり、官官接待問題あり、等等。今、日本は世界の中でどう振る舞うべきなのかを問われている。戦後50年、日本は急速に成長し、世界の中で大きな存在となった。今、その中で日本は改革を迫られている。

それは日本人の国際人としての自覚であ

ろう。私は常日頃、日本人の国民性に疑問を感じることが多い。昨年、市の車で子宮癌検診に出かけたある日、お年の患者さんが内診台に上がろうとして、もたもたしていると、「早く上がりなさい、こっちへ出てきなさい、腰を浮かせて、下です、下へ下がってきなさい」と看護婦が言う。丁寧な命令語で、まるで子供扱いである。看護婦さんは無愛想で、冷たい人である訳でもない。どちらかという、やさしい部類に入る人だ。その患者さんもおとなしい人なのか、「はい、すみません、はい、はい」と従っている。おかしい、看護婦さんは命令するのではなく、示唆・提案するべきだし、患者さんは「失礼な人だ、帰ります」というべきだ。何なんだこれは。

マスコミの横暴さはいつも言われることだ。自由を楯に、人のプライバシーの中まで、ずけずけ入る。それをみんな怒っているのに、一向に変わらない。皆が、何も行動を起こさないからだ。マスコミは人の弱点ばかりをえぐり出す。近頃は、自殺の仕方という本が売れており、それを高校生達を読んでいう。またマードラスブックとか言って異常犯罪者の事件をこと細やかに書いた本が出ているとか。何になるのか。元来ペンは人を糾弾したり、おとしめたり、扇動したりするためにあるのではなく、よいことをみんなに知らせる為にあるべきではないのか。

半年程前に、ジョエル・シルバースティンと言う人の書いた「日本人は、まだ十二歳」（ごま書房）という本を読んで、眼から鱗ものであった。一部引用させてもらおうと『「日本人は十二歳」とは、終戦直後の

日本と日本人を評したマッカーサー元帥の言葉だが、それから半世紀も経とうというのに、日本人はいっこうに大人になっていないようだ。「検討させて下さい」と、結論を出さない会議をダラダラと続けたがるビジネスマン、標識、警告、注意書きの氾濫する街並、「「お上」の決めたことだから」といって半透明のゴミ袋にいやいや従う主婦……。私の目から見た、日本人の「十二歳」ぶりを挙げればきりが無い。責任を負わされるよりも、「人まかせ」にしたがる自分たちの姿を見つめなければ、いつまでたっても、日本人は十二歳のままかもしれない。』

本文の内容を要約してみる。

①「ちょっとお目にかかってお話をしたい」が口ぐせの日本のビジネスマン。大した内容もないのに、ただ顔を会わせたという事で仕事をしたということになっている日本の企業の甘さ。これは今までに本当の競争をしてこなかったからだ。そして、相手の人の貴重な時間を奪っている。日本人が好きな会議は、集まることに意義がある。「日本のブルーカラー・ワーカーは世界一で、ホワイトカラー・ワーカーは世界で最低」。日本で会議が多いのは、フェイス・トゥ・フェイスで人間関係を大事にしているのではなく、自分一人で責任を負いたくないから「共同責任者」が何人か出てくるまで話し合いを続け、「総意」という形が出来るまで結論を先延ばしにしているだけなのだ。

②ベビーシッターがいちばん向いている日本のOL。一言でいって、日本の十八歳から二十五歳あたりまでのOLは信じられないくらい幼い。ミッキー・マウスやトトロの

キャラクターグッズを持って、可愛い、可愛い、と言う信じられない光景を何度みたことか。関心があることといえば、食事や洋服やデートやテレビ、誰々がくっついたとか別れたとか、自分の身の回りのことだけだ。アメリカで言うと、ちょうど十二、三歳あたりの女の子によく似ている。その背景には、責任を持ちたくないOL・責任を持たされてないOLの問題がある。例えば、あるOLにあることの解決を頼むと、「こう言ってます」「こうだそうです」と一つ一つ言ってくる。子供の使いだ。頼んだ方は空いた時間に他のことが出来ない。それなら自分で始めからした方が時間の無駄にならない。

③怠ける生徒を監視する小学校の教室のようなオフィスのレイアウト。日本人は管理されるのに慣れてこで、自分が何か忘れたら誰かがカバーしてくれるだろうとの意識がある。自分は自分、もし出来なかつたら、責任を取るという意識がない。日本の銀行も窓口には子供しかおいてない。即ち、カウンターには何の責任も持っていない女性が座っていて、何かあれば上司に聞いてきますと子供の使い、その後ろに少し責任のある人がいて、またその後ろに責任を持つ人がいる。アメリカのシステムでは社員を大人と考えそれぞれに決定権を与える。その人の決定内容が悪ければ、降格かクビになる、クビになりたくないから、勉強もするし、さらにお客さんが増えるように努力する。しかしこの事に関しては、日本の村社会があるからこそ、中小企業は伸びてきたので一概に頷けない所でもある。

④ボイラーが故障したのでメーカーに言っ

たらある一人が手ぶらで見に来た。後日、他の人が来ますと帰った。数日して一人来た。だがなおらない、エキスキューズが始まる。ああだこうだとクレームをつける。結局なおらない。米では修繕屋は高いのでよっぽどの事がなければ頼まないし、頼めばすぐに直してくれる（手ぶらではこないし、とりあえず顔だけ出すなんていう無駄なことはしない）。よくこれで日本人は黙っているものだ。日本はノーロジック・ノー文句・ノートラブル社会なのである。しかし、日本人が日本人だけの「なあなあ」の社会でぬくぬくと生活できた幸せな時代はとっくに終わりを告げている。災害時に、強制収容所のような所に入れられ何も文句は言わない、何もしない、政府の言うとおりにする。何から何まで政府が国民を保護してくれるという幻想から、もういい加減目覚めてよいのではないか。

⑤日本人は「ユア、ウェイ」米は「マイ、ウェイ」、ハンディキャパーを隔離してしまう日本、不揃いのリンゴはダメで、均一な「ふじリンゴ社会」を望む潔癖主義の日本。日本人は「NOと言えない」のではなく、「NOを聞きたくない」のだ。それはショックに弱い子供、トラブルを嫌がる、勇気のない人間達の集まりではないか。危険を感じると、頭だけを隠すダチョウに変身する日本人、アンフェアなことをしても、「時間が経てば、どうにかなる」と考えたり、アンフェアな行為を目撃しても「トラブルは面倒だから見て見ぬふりをする」日本人。オフィスではあれだけ立派な紳士が、通勤電車では暴徒と化す。「旅の恥はかき捨て」とは上手く言ったものだ。日本人は

自分の内側に規範というものを持っていないくて、組織の規範に従うから、そこから出たときには、致し方なく、状況によって変化してしまうのだ。人が見ていると恥ずかしく、人が見ていないと恥ずかしくない、というのは自分の中にマナーがあるわけではなく、状況によってマナーが存在するわけだ。

⑥今は「ワンチャンス社会」の日本だが、いずれ「セカンドチャンス社会」となる。肩書き名門出身だけではだめ。競争社会・能率給、大人の社会が必要となる。大人の社会とは、自らで判断し、自らの行動に責任を持ち、自らモラルとルールを持ち、それに従って生きていく社会だ。「日本のことは他の国のヤツにはわからない」という欺瞞と傲慢を持つ日本人。普通交渉で合意に達していないときには、「あなたの考え方は違う」とか「あなたの分析が違っている」という言い方になるが「あなたは我々を理解していない」とは言わない。よく考えれば失礼な話だ。日本は金太郎飴社会で画一性を好み、学歴・肩書きを重んじる。

⑦ガイジンがされる質問のベスト5は、1) 1) いつ、アメリカにお帰りですか？ 2) どうして日本に来たのですか？ 3) 日本に「コレ」ありますか？（小指を立てて） 4) 納豆食べられますか？ 5) 日本女性の胸は小さいでしょう？ 何故、日本人は皆同じ事を聞くのだろう。

⑧日本人は休日でも会社を引きずっている。挨拶には必ず〇〇商事の□□です、という。日本人のブランド志向は横並び意識の産物、欧米人のそれは、クオリティと信用の保証で、出来れば自分だけの高級ブランドのも

のを持ちたいと思っている。米の一般的な教育は、何よりアイデンティティが大事、アピア・プレッシャーから抜けだし、それを確立したとき大人になると教えられる。アイデンティティの確立とは自分の責任でリスクを冒すことでもある。（アピア・プレッシャーとは、まわりのみなと同じものでなければ、何を言われるかもしれない、例外になりたくないと言う気持ち）ルイ・ヴィトンシンドローム、ロングラインの後ろに並ぶのが好きな日本人。注意書きが多く、管理されていることに文句を言わない、子供扱いされても何とも思わない日本人。週休2日制の導入で、あるサラリーマンに休みが増えたらどうするかと聞くと、「うーん、困ったな、会社が決めてくれると有り難いんだが」と答えたのには開いた口がふさがらない。

⑨日本の「おしん妻」が定年離婚を増加させている、日本の母親の面倒見がよすぎるために、日本の子供の「ストリートセンス」（自活する子供）がいつまで経っても育たない。過保護過ぎる。漫画をよむ大人、少女のようなヌードを載せる雑誌、変態漫画と思われるような成人漫画を恥ずかしげもなく見るサラリーマン。とても世界に誇れたものではない。

⑩官僚の強い日本、政治家は何も知らない、また国民は「国益」に関わることより、自分たちに仕事をばらまいてくれる人を大事にする。「リーダーシップ」「リスク」「責任」は同義語だが、そのどれもが、日本の政治家にはない。日本にはデモクラシーもなかった。人知れず、暗い、じめじめしたところで育つ「しいたけ政治」を作り出す、日

本の官僚達。お役人は大人で、国民は子供である、保護してあげなければ大変だ、と思っているのだろう。自ら選択させない政府が、選択できない国民を生んだ。そして勇気のない国民の我慢強さが、お役所の規制を強くしてきた。しかし国際競争に立ち向かうためには、日本は変わらなければならない、古き良きものは沢山あるが、守ってばかりはいられない。日本は開発途上国ではない、先進国としての責任・義務があるのだ。

以上長々とこの本の要約を書いたが、日本の社会は「村社会」、争いを好まない農耕民族、よく分かる。外人コンプレックスは、未知の文化に対する恐れが人一倍強いからなのだろうと思う。人との本当の競争をする必要はなかったのだ。日本の良いところも沢山ある、犠牲心、献身的愛、人の良さ、ジャパニーズスマイル等など。

しかし、医療の現場でも、厚生省が決めた薬価に重々と従う子供っぽさ。その度にレセコンの変更代を払い、医事課職員の仕事が増え、社保が国保が云々、審査はどうなっていると腹をたて、おとなしいものだ。あちらさんの言い出した、インフォームドコンセントが云々いわれるので、患者さんに説明をすると、かえってこじれてしまう。准看より高看というが、なかなかそうもいかない。出来る学生は大きな病院が優先的に取ってしまい、高看となり、鼻持ちならない看護婦に育て上げる。准看はベビシッターだ。元来の日本人の意識がまだ国際化されてないのであるから、難しい。親であった政界は、親の義務を果たしてないじゃないかと子供である国民に言われている

ぞと、マスコミというお化けに、日夜脅かされている日本国。子供である国民は、お化けの言うなりで、今度はこれを親だと思い始めているのか。いつまで経っても、国民は子供のままである。親が親なら、子も子だ。

何故冒頭でいった「伝言ゲーム」になるのか。まず、完璧を求めてはならない。伝言はあくまで伝言で変化は致し方ない。変化して困るものは、文書にするしかない。文書にしたものは、能力あるものが処理する。この能力ある者と言うのが問題で、悲しいかな、能力のある者が少ないのである。私を含めて子供なのである。即ち、日本人である我が従業員は大人じゃない（ちょっと言い過ぎたかな、でもそれで怒っても、こちらにはちゃんとエキスクーズは用意してある）。まずは大人になることだ。仕事の責任とは、義務とは、権利とは、を考えながら。その為には、従業員自身が自分は子供だったと思って貰うよう、そして早く大人になりたいと思ってくれるようになるまで、トップは親を演じ続けることだ。一生懸命に。ある昔の経済学者が言ったそうである。「我々が何もしないでもある権利があるだろうか。ありはしない。権利は主張してはじめて権利となる」このようなことを。

嘆いてばかりもいられない。小さな医院の少数の日本人医療従事者が、そこに集まる少数の患者さん達が、大人へ脱皮すれば、日本も少しは変わるかもしれない。医療も少しは変わるかもしれない。そう信じよう。

忘年会

日時：12月14日(木) 午後6時30分～

場所：金久旅館

出席者：33名

近藤会長挨拶

お寒い中、皆様方お集りいただきまして誠に有難うございます。本年はイノシシ年でございまして、イノシシの年は荒れると昔からよく言い伝えておりますが、その名の通り大変な1年でございました。1月にはいりまして、すぐに阪神大震災が occurred しましたし、地下鉄サリン事件というとてもない事件が occurred しました。あるいはあちこちで地震が occurred たり、ハイジャック事件が occurred たり、あるいは大和銀行の不祥事件が occurred たりという事で、大変な1年であったと思います。

まに皆様方も大変な1年であったと存じますが、お蔭で1人も欠ける事もなく皆さんと顔を合わせる事ができたというのは、大変幸せに存じております。

光医師会に関しましては、お3人の先生方福本先生、田村先生、横山先生が健康を害されまして入院されました。幸いにもお3人も大変経過がよろしゅうございまして、お元気になっておられます。誠にうれしい事であると思います。

それから光医師会にとりましても、周南医学会が光市の引き受けでございまして、まあ学会としては小さい学会だという事でございましょうが、大変な事でございまし



て、赤崎委員長をはじめとして委員の皆さんの獅子奮迅の働きがございまして、また当日は会員の皆さま全員が力を合わせて頑張っていたいただきまして、お蔭さまで大成功に終る事ができました。皆様方が大変いい学会だった、いい講演だったと褒めてくださいますので大変喜んでおります。

来年は1月早々に役員の変更がございまして、また大変な1年になるであろうと思われま。どうかそのさいも周南医学会で皆の心が一つになって一つの事をやりとげて成功したという、その体験を生かして皆様方と共に頑張っていきたいと思ひます。

本日は粗酒粗肴でございまして、1年の憂さを晴らして来年のために、おおいに飲み且つしゃべっていただきたいと思ひます。どうも有難うございました。



中村国雄先生・廣田通男先生の古希のお祝い



〈忘年会スナップ〉



12月度定例理事会

日時：12月13日(水) 午後7時30分～

場所：医師会事務局

出席者：近藤、前田、梅田、光武、藤原
藤村、市川、赤崎、吉村

議題：

- 1) 医師会長会議の報告 (近藤会長)
- 2) 市へ提出する要望書の件 (近藤会長)
 - ・ 地域医療、学校保健、保育所の出務等に関する事項
 - ・ ツ反、BCGの個別接種は保留とし、小学校4年生にEKGの実施の要望を追加する。その他は原案を了承
- 3) 「乳癌検診」について (光武理事)

検診の終了時間を検討して欲しい。
その他
- 4) 臨時総会について (近藤会長)

主議題として、入会金の改訂、役員選挙
- 5) 休日診療所について (近藤会長)

外科系の診療所への出務が議論の中心であった
- 6) その他
 - ㊦ 図書購入の件
 - ㊧ 会員より休日在宅医の免除の申し出がある。70才以上で免除の申し出があれば認める方針で、了承
 - ㊨ 会員よりA会員からB会員に変更願いがあり、それに伴い学校医、休日在宅医等の返上の申し出がある。了承
 - ㊩ 学校医変更の件
 - ㊪ 一般会計に100万円を山口銀行より借り入れる。了承
 - ㊫ 5月の連休の休日在宅医の予定がもう少し早く決めて欲しいとの要望がある。

検討するが、現状では困難であるかもしれない。

㊬ 予防接種ガイドラインの件

勉強会

心電図研究会(第90回)

光市・下松医師会合同

日時：12月12日(火) 午後7時30分

場所：光商工会館

出席者：9名

講師：河野隆任先生

症例：

- 1) 50才、♂、主訴一手、足のしびれ、
 - 2) 50才、♂、主訴一手、足のしびれ、体がだるい
 - 3) 68才、♂、主訴一吐血
- 3例とも中毒で、それぞれの中毒の心電図を河野先生が解説

レントゲン勉強会(第8回)

日時：12月5日(火) 午後7時～

場所：光商工会館

講師：徳山中央病院 岡本安定先生

出席者：11名(光一9名)

会員の症例、岡本先生の症例を岡本先生が解説



12 月 度 月 間 行 事

日	行 事	場 所
5	レントゲン勉強会	光市商工会館
12	心電図研究会	光市商工会館
13	12月定例理事会	医師会事務局
14	忘 年 会	金 久

ⅢⅢ あとがき ⅢⅢ

年も改まり、おだやかな1年を願っておりましたが、新年早々首相退陣という出来事で幕があきました。なにか今年も破瀾含みの感じがいたします。

小寒から15日後が大寒で、大寒と立春までの15日間のあわせて30日間を「寒の内」と言いますが、字の通り寒い日がつづいております。今冬は寒さが大変きびしいように感じます。

「初日」の写真を虹ヶ浜海岸で撮影と思って日の出を待っておりましたが、山端に雲がかかってなかなか太陽が顔を出さず、影のような写真になってしまいました。

忘年会のスナップ写真の数葉がピンボケになっており、お見苦しいと思います。

今年1年がなんとか平穏でありますよう、祈りたいものです。

(吉村)

新 報 刊 行 日 表

1996年1月	1996年2月	1996年3月	1996年4月	1996年5月	1996年6月	1996年7月	1996年8月	1996年9月	1996年10月	1996年11月	1996年12月
1996年1月	1996年2月	1996年3月	1996年4月	1996年5月	1996年6月	1996年7月	1996年8月	1996年9月	1996年10月	1996年11月	1996年12月

発行所	光市医師会 TEL 0833 72-2234
発行者	近藤龍一
編集者	広報担当
印刷所	光市光井一丁目15番20号 中村印刷株式会社